

雪国の頭痛の種「過剰な雪」を自然エネルギーの雄に!!



雪室から取り込む適度な冷気がコシヒカリの貯蔵にも大きな役割を果たしている（魚沼市）

世界有数の豪雪地帯として知られる新潟県内陸部では、昭和の前半までは「多すぎる雪をどう克服するか」という《克雪》が最大の地域課題だった。だが時代の経過とともに豪雪を活用しようとする《利雪》という考え方が生まれ、さらに現在では豪雪をポジティブに捉える《親雪》という考え方が前面に出てくるようになり、それは《雪の産業化》を図る動きとも繋がっていく。

さらに令和に入った現在、脱炭素社会を目指すSDGsの潮流と合体。多すぎる雪を環境保全にも役立つ《地域財産》と見る動きにも繋がっている。その雪の産業化の主役は、冬の間に降り積もった膨大な量の雪を貯蔵する《雪室》だ。

雪室は北信越・東北地方などの豪雪地帯で古来、伝統的に行われてきた雪の活用法の代表的存在だ。雪室の内部は低温・高湿度に保たれるため、食品の鮮度保存だけでなく熟成の効果もあることなどが、現在では各種の科学的分析などによって証明されている。空気清浄化の効果も持つ雪の冷気を活用した天然冷房は、排出ガス・ゼロのクリーンエネルギーでもある。

近代以前の人々はそれを経験的に知っており、この雪室活用の先進地域の一つが、新潟県の魚沼地方や上越地方だった。

前述のような貯蔵のための活用法に加え、近年とくに注目されているのが、データセンターのサーバーから排出される膨大な熱の冷却化を、雪を冷熱源とする雪室の活用で図ろうとする動きだ。ネット社会の現代の推進エンジンともいえるべきデータセンターの安全な運営は、現代社会の要の一つでもある。

日本の雪国の多すぎる雪は、電化社会が発する熱を鎮静化させる役割を、今、一部で担おうとしているのだ。（未知草）